

PROFILE

東京大学文学部卒業後、東京放送(TBS)に入社。退社後、九州大学医学部に入学し、昭和53年卒業。卒業後、海外研修等を経て北九州市などで精神科医として勤務。平成17年に福岡県中間市で通谷とおりにメンタルクリニックを開業。開業医をしながら作家として創作活動を行う。「閉鎖病棟」で山本周五郎賞、「逃亡」で柴田錬三郎賞、「水神」で新田次郎文学賞を受賞。綿密な調査に基づき、人間の心や命、社会倫理を鋭く捉えた小説を世に出し続けている。

精神科医 (小説家・はな 常木 蓮生)

森山成樹

もりやま なりあきら

進路を定めるにあたって軸となるのは学力。

東大卒業後、テレビ局に就職。その後、医師の道を志す。

——先生は、大学を卒業後就職されたテレビ局を退社され、再び大学で医学を学ばれたと伺いました。一度就職された後、どうしてあらためて医師の道を歩もうと思われたのでしょうか。

森山 もともと高校生の頃は理系のクラスにいたんです。けれども進路を決める頃、島尾敏雄さん、梅崎春生さんなどの戦争文学や、第二次世界対戦で戦没された学徒兵の遺稿集『きけわだつみのこえ』などを読んで、文字の力の凄さに感銘を受けたんですね。それで作家になれたらいいなという思いもあって、東京大学文学部の仏文科に入学しました。卒業後は東京のテレビ局に就職し、歌番組のアシスタントディレクターなどを務めていましたが、40歳を過ぎた頃から閑職に就く先輩もいたり、周囲を見ていて、自分にとっては一生続ける仕事ではないなという思いが強くなってきました。それで、年をとってもできる仕事をしたいと思い、医師になることを決意しました。会社を辞めて受験勉強をはじめ、無事、九州大学に入学することができたのは25歳の時でした。

——九州大学ではどのような学生生活を過ごされましたか。

森山 1、2年生の時は教養の授業でしたが、周囲の医学部の学生達は、医学に関係ない学問だからとさぼりがちでした。けれども私は、一流の先生の話が聞けるのが嬉しくて一生懸命出ていましたよ。フランス語の授業などは、受講生は私一人。贅沢なことに、フランス文学の第一人者である城野節子先生にマンツーマンで教えていただきました。大学は、一度社会に出てから入学するべきかもしれないですね。一度社会に出ていろいろな経験をした後の方が、学ぶことのありがたみがわかって一生懸命勉強しますよ。

——専門に進まれてからはいかがでしたか。

森山 骨学の授業がスタートだったと思います。人体の小さな骨まで全て名前が付いていたのには驚きました。それを全部暗記しなければならなかったので大変でしたが、名前を覚えることが、物事を知る第一歩なのだと思います。解剖学の授業では、学生4人に対してご遺体1体が割り当てられました。一番つらかったの

インタビューシリーズ

九大人

2011.11.9 interview

聞き手

村山 実和子

むらやま みわこ

大学院 人文科学府

修士課程 2年



森山成樹さんは、本学医学部のご出身です。現在は、福岡県中間市でメンタルクリニックを開業されています。一方で、九州大学在学中から、常木蓮生のペンネームで小説を執筆。30年以上にわたって話題作を発表し続けていらっしゃいます。今回は、九州大学での学生時代、作家としての歩み、医師としての仕事のことまで、人文科学府修士課程の村山実和子さんがお話を伺いました。

このインタビューは平成23年11月9日 中間市の通谷メンタルクリニックにて行いました。

は頭部を扱う時。かめの中にホルマリン漬けにされた頭部が入っていたのですが、その中から自分たちに割り当てられた頭部を探さなくちゃならなかったんです。これは強烈に印象に残っています。でも、その頃から、医学の世界には小説の題材になりそうなドラマティックなことが数多くあると感じていました。

——もともと文章を書くことには慣れていたのでしょうか。

森山 中学生の頃から冒険小説などを書くのが好きでしたし、もともと文学部にいましたからね。東大時代は剣道もやっていたましたが、部の同門誌に短編を書いて寄稿したりもしていました。でも、作家として認められたのは医学部の学生時代です。在学中に書いた「墟の連続切片」が、新潮新人賞の最終選考の4編に残ったんです。そして、卒業後に出した『白い夏の墓標』が直木賞候補になり、医師兼作家という道を歩み始めました。

医学も小説も、 新たな領域に光をあてる。

——先生の小説は、医療、戦争、歴史など幅広いテーマを題材にされていますね。

のですが、たつぷり時間があつたので一年かけずに書き上げました。専門作家は筆が進むもんなだと思いましたよ。

——作品を拜読して、いずれも、その調査力と分析力に感嘆させられます。どれくらいの量の資料を読まれているのですか。

森山 一つの作品に対して、100〜150冊くらいの資料を読みますよ。クリニクの休みの日を中心にあてています。昨年発表した『蠅の帝国』は、九大に勤務していた頃に集めていた資料を20年に渡って調べてきました。今は、「卑弥呼」をテーマにした作品を書いています。以前、奈良の考古学者の方々にお会いした時、皆さん、邪馬台国は奈良にあったと主張されていましたね。私の九州存在説は一蹴されました。それが悔しくて、私の思いを小説に書いてやろうと思いました。

極めたいものがあれば、 週21時間、10年間続けること。

——精神科医として様々な患者さんと接していらつしゃって、以前と変わってきたなと感じられることはありませんか。



森山 自分が書きたいものを書いていくだけです。小説家というものは、ヒット作に恵まれると、次回作も同じような路線のものを期待されます。そうなる、その路線からなかなか抜けられなくなって、自分の書いたものを書けなくなるんですよ。売れるというのは一種の麻薬ですね。私のように、医師の仕事の傍らで書く「日曜作家」なら、自分のペースで好きなものを書けますけどね。

——書くことを専業にしようとは思われなかったのですか。

森山 思いませんでしたね。私は、文学から医学に転向した人間です。医師を辞めるわけにはいきませんよ。よく「どうしてもものを書いていくんですか」と聞かれますが、医者だけでは食べていけないからアルバイトで書いてるんですと答えています(笑)。

——先生の作品は、なかなか人が気付かないような部分に焦点があてられていると思います。それは、研究において、新しい領域に目を向けるのと似ている気がします。

森山 医学論文と似ていますね。医学論文は、二番煎じでは受け付けて

森山 身の上相談を聞くことが多いになりましたね。昔は、家族や近所の人たちに相談していたことが、今では相談できなくなっているんじゃないでしょうか。酒、ギャンブル、DVなど、いろんな話を聞きますよ。それと、うつ病の方が増えています。突然、職場を解雇されたり、会社に残ってもこなしきれない仕事を与えられたり、働く人たちが疲弊していると感じます。社会が変わらなければ、この状況は変わらないでしょう。

——自分の人生において、その進路を変更するのは勇気がいることだと思いますが、先生の中で軸となったものは何だったのでしょうか。これから進む道を決めていく学生達にアドバイスがありましたらお願いします。

森山 軸となるものは学力ですよ。私も学力がなければ、医師にはなれなかったでしょう。『ソルハ』という作品の中に書きましたが、「一万時間の法則」というものがあるんです。1日3時間、週にすれば21時間、10年間毎日続けて物事に取り組めば、その分野で傑出した者になれるというものです。私も若い頃は本当によく勉強しました。

もらえませんか。医学部の時、まず「観察し」、「由来をたどり」、「揺さぶってみる」ということを教えられました。これは小説にもあてはまります。まず物事を観察し、それをテーマに書かれた過去の資料をたどつてみる。そして、最後に自分なりの視点を加えて書くのです。また、医学論文は、助詞の一つに至るまで厳しく指導を受けるので、論文を書くことで文章力も鍛えられました。

——開業医としてのお仕事の傍ら執筆するのは大変ではないですか。

森山 そんなことはありません。毎日4時から6時までの2時間を執筆にあてています。「先生のクリニクはそんなに早く閉まるのですか」と言う人がいますが、とんでもありません。朝の4時から6時です。30分で一冊書くので一日で4枚。一カ月に100枚ほど書けます。年間にすると1000枚ほどになるのですが、それがちょうど長編一冊分の量になります。毎年、一月から書き始めて、年一冊ペースです。しかし、2008年に急性骨髄性白血病を煩って入院することになりました。幸い完治しましたが、その時だけは専業作家でした。病室で書いていた

よく20代の頃に戻りたいと言う人がいますが、私に言わせればあんなに大変だった頃に戻るなんて考えられません。それくらい必死でやりました。もう一つ、「良い習慣は能力を超える」という言葉を贈ります。どんな人でも、毎日の努力が習慣となれば、天才を超えることだってできます。作家についても、時折休筆宣言する人がいますが、とんでもないことです。書かなければ筆は鈍ります。プロの作家というのは、書くことを止めた人です。何を止めるにしても毎日の努力が大切。学生の皆さんには、しっかりとした学力を身につけて、自分の目標に向かって進んでほしいですね。



2011年に出版された「蠅の帝国 軍医たちの黙示録」(新潮社)。軍医の眼を通して先の戦争を記した短編集。続編の「蜚の航跡 軍医たちの黙示録」も出版されています。